

---

# 背を向けて！

kabadei

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

背を向けて！

### 【Nコード】

N4048X

### 【作者名】

k a b a d e i

### 【あらすじ】

環境問題が深刻化し、絶滅の危機へ瀕した人類。

彼らは禁忌であるクローン技術へと手を伸ばし、ある成功へとたどり着く。

第二児と呼ばれるようになった少年少女は数々の制約を背負い、軍事的な訓練のため、過酷な生活を送ることになってしまった。

・・・しかし何を間違ったか、割とフリーダムとなってしまうた。

今日もある少年が闇討ちから逃れ、ある少年が私欲のために暴れ、

テストから逃れるために全校生徒が教師に歯向かう。

これは、そんなお話。

## いつもの風景（前書き）

基本的に長文&不定期更新になるかと思えます。  
暇なときにこそ読んでもらえるとう幸いです。

## いつもの風景

彼は、速かった。

誰よりも早く、そして速い。

人でも動物でも風でも重力でさえも、彼の前では障子ほどの障害ともならない。

そして、彼は今日も走り続ける。

ありとあらゆることから背を向け、どこでも

「ちつくしょう！うわっ！？」

グラウンドを疾走し続ける俺の足元に、急に青く光る円が浮かび上がる。

今の俺の速度は亜音速ほどのはずなのだが、その円、否、魔方陣は、高速に慣れた俺の目でさえも速いと思わせるほどの速度で土の地面に文様を描く。

その意味をコンマ一秒に満たない、一瞬でさえも霞む速度でざつと解析して、すぐさま俺は前に向けて低く跳躍する。

走り幅跳びの要領の、体を“く”の字に曲げた空中での前進だ。

俺が跳んでその場から離れるや否や、魔方陣の輝きが眩いものとなり、それと同時に、

「間に合え！・・・水円柱！」  
ネオ・スプリングクラ

遠くから男の声が響き、それに呼応するかのよう<sup>に</sup>に魔方陣が爆発とさえ思える膨張を開始。

軽く6〜7メートルは跳んで着地した俺の踵寸前までそれは広が<sup>り</sup>、内心やべえと冷や汗を掻いた時、魔方陣から凄まじい勢いで水柱が噴出する。幅は7メートルを下らないだろう、あんなのに巻き込まれたらどうなるか、考えたくもない。

そう思つて（絶対に当たらねえ）ともう一度内心で頷いた俺だったが、

「行かせねえよ『神の足』！」

目の前から、俺ほどではないが十二分に常人を駕する速度で走ってきた背丈の小さい男が、その速度のまま軽く地面を蹴り、つかの間空中に浮かぶ。

何をしてくるか、いやなよかん経験で何となく察知した俺は疾走する身を低くする。

予想通り、彼は身を捻る。

見てみれば、彼の足の少し前に、結構な量の魔力が練り込められた黒い球体が渦巻いていた。

捻った身を慣性に任せ、彼は足を振りぬぎ、魔力の球体を蹴りぬく。

「いい加減当たれ！パワー・ストライク！」

「嫌だよ！つーか死ぬよ!？」

蹴られ、普通のボールのように凹む魔力球。

そこから魔力光を発しながら、レーザーのような黒い光線が押し出されるようにして出てくる。

その数、60・・・ああもう数えられん！

爆発するかのように放たれた魔力光線は、正確に俺の走る道、ひいては俺の逃げ道までに突き刺さる。

今までも一番多い数だ。彼も俺が当たると思ったのだろう、「っしやあ！」とガッツポーズまで決めている。

しかし、

「こんなの、当たったら病院じゃすまんわ・・・!!」

視界を覆い尽くすように次々に降り注ぐ光線を前に、俺は横でも後ろでもない。

前に逃げた。

俺は足に魔力を集中させ、刻み込まれた記憶けいけんの中から、この状況を打破するためのものを選ぶ。

今回は右も左も上も下・・・は流石にないが、どこもかしこも即死級の光線が今もなお落下している。

日常風景だ。

だから、俺はいつも使っているものを選ぶ。

「行くぞ！強歩！」  
ハート・ステップ

練りこんだ魔力が意味を成し、強化を足に刻むのを確認すると、俺は一気に加速する。

胸を抉るように一本来た。身を捻って回避。

次は腕、足、胴体。

面倒なので右斜め前に跳躍。

下を見れば、当然のように足元に光線が来る。

体を倒し、軌道を変えて避ける。

しかしその先にも光線が。

見つけた、微かな足場を踏み、光線を縫うようにして跳ぶ。

抜けた。

「何・・・!？」

「ダメだ！今回も逃げ切られるぞ！誰か止める！」

一瞬で5メートルほどを跳んだ男に目掛け、数人の男女が杖や指を急ぎ振り回し、その先から熱線や光の槍などを飛ばす。

しかし彼は空中で身を丸め、回転したかと思うと、“宙”を蹴った。

啞然とする見物人を余所に、彼は後ろの光たちを無視して、髪を逆立てながら手で着地する。

そこから体操選手のように何度も前に向かって回転し、追尾式の魔法も、大半が地面に不時着してしまう。

残ったものも、また走り始めた彼が、

「強走！」  
ランニング

と叫ぶと、全て一瞬のうちに置いていかれてしまった。そして彼が、『ゴール』と書かれた鳥居のような枠をくぐると、見物人からは歓声が、参加していた物からはため息と無念の叫びが。

「っはあ．．っはあ．．．こ、今回もどうにかなった．．」

ゴールと同時に倒れこみ、肩で息をする中肉中背の少年。

彼は在学生の全員、計451名の能力者の上、校内順位ランキング10位以内に位置する強豪。

能力名は『不足脚』、二つ名は『神の足』を持つ。

彼の生きるこの時代、2045年。

人類は窮地へと立たされていた。

環境問題により増大する被害と、それも伴い深刻化が進む少子化。どの国の科学者や理論家がどんなに楽観的に現状を見ても、滅ぶのは10年もないとされた。

各国の主脳達は会議を繰り返し、倫理を無視した繁殖目的の法律を提案したり、却下したり、そんな繰り返して時間を浪費していった。

しかし事態は恐ろしい速さで深刻化を続け、必死の二文字に憑かれ、ある結論に至る。

『強い人間への昇華』。

つまりそれは、人体実験などの禁忌と銘打たれる行動の実行を意味していた。

なりふり構ってはいられない状況だったとはいえ、しかしモラルの反対は当然の如く発生し、何とか現存する人間への被害は避けられないか。検討を続け、禁忌のうちの一つが紐解かれた。

クローン技術である。

財政も捨て、政治も捨て、戦争も捨て、全てを捨て。

より強い肉体を、どんな環境でも生きられる生命力を。

より高い知恵を、どんな状況も切り抜けられる叡智を。

求め続け、そして一つの結果を出す事に成功する。

それは、『知識をそのままに、新しい生命へと受け継がせる』というものだった。

記憶は遺伝しない。が、その結果は余りにも衝撃的で、かつ魅力的だった。

研究に狂気も入り混じり、猛烈と言つていい速度で進歩を遂げたこの技術は、『細胞間でも受け継ぎができる』というところまで発展した。

無論それにも限度はあるが、ありとあらゆる受精卵で、ありとあらゆる知識のパターンを埋め込み、成功したわずかな完成体を成長させる。

だが、体外培養によって生まれた赤ん坊は、目を覚ますと同時に泣き喚き、聞くも無残な悲鳴を上げてその幼い命を落としていった。

「何故だ」

「我々の研究は完全なはずだ」

そんな声が飛び交い、この数年にわたる研究は無駄だったのか。

これ以上の進歩は不可能なのか。そんな声まで上がった。

だが、そこに救いか、はたまた悪魔の手が差し伸べられた。

科学と対極を成す存在、

オカルト野郎  
イカレタ奴ら。

彼らの非現実的にして非科学的な発案は科学者との激しい口論を生んだが、お互いにそんなことをしている場合ではないと手を取り合う。

そして知識の部分に哲学や、精神論、人のあり方。神の存在。

そのようなものを追加し、第二の出産が行われた。

するとどうだろう、目を開けた赤ん坊は最初は驚いたかのように息を止め、目を見開いたが、すぐに正常な赤ん坊としての泣き声を

上げ始めた。

協力者達は躍り上がって喜び、すぐさま結果を報告する。

主脳達から民間へと流れたその知らせは人々に希望をもたらしした。

だが、ここでも問題、もしかすると嬉しい誤算が発見される。

ある一定の年齢まで成長し、人格も形成されてきた子供達は不思議な力を持ち、それを体内で操って特定のイメージを持つことで、いわゆる魔法まじきを起こす事がわかったのだ。

ある子は手から小さな炎を出し、ある子は物体を浮遊させた。

彼らは成長と共にその力を増し、故意ではないが人的被害も増えた。

だからというわけでもないが、研究の主力であり立地も環境も丁度いい日本に、専用の教育機関を設けることが決定したのだ。

その学園が建設され、経営されてから10年。

卒業した者達が教師として指導をし、そのローテーションを組んでしばらく。

いくつかのもの、それこそ一人一つと言っているいい能力の中で、一風変わった力を持つ少年がいた。

その名は、風浦かぜうら 草路そうじ。

成績普通、授業態度良好、友人関係異常、戦闘能力0、逃走率95%を誇る。

彼は今日も、全てのものから背を向け、真っ直ぐに逃げる。

どこまでも。

## いつもの風景（後書き）

いかがでしたでしょうか？

少しでも楽しんでいただけたらそれ以上に嬉しい事はないです。

さて、読んでいて「はあ？」とか「なんじゃこりゃあ！」と思った不満や疑問をどうぞ遠慮なくぶつけてください。

感想でもレビューでもなんでもいいです。

それが私の力になり、（・・・マゾ的な意味じゃないですよ？多分）これからの参考以上のものとなると思います。

ですので、そこら辺のことを、どうぞ宜しくお願いします。

## 春、入学。

桜と初々しい恋が散る季節。  
春。

僕は、特立新世界学園、通称“特新”と呼ばれる学園に入学する。

封筒に入っていた地図と照らし合わせ、念のため切り抜いてきた写真も見て確認する。

うん、あつてる。大丈夫だ。

今日は噂に聞く入学式の日らしいのだが、遅めに来たせいかな広い門を通して見回しても、学生どころか人っこひとりいない。

閑散とした雰囲気緊張も覚えるが、かえってこっちの方が気が楽だと思いき直す。

しかしいつまでも突っ立っているわけにもいかない。

ともすれば震え出しそうな足を抑え、馴れない堅い制服に身を包んで、僕は新たな生活への第一歩を

踏み出そうとしたら横を何か走り抜け、視線を向ける前に大気から弾け飛ばされた突風で宙を舞った。

「・・・なっ!？」

あまりの事態に判断が追い付かず、地面を見上げていることにも気づかないで声を上げる。

何だ何だ!?

というか今のは何!?

体を浮遊感が襲い、竦み上がるような焦りを飲む。

だが、

(・・・これくらいなら、毎朝の狩りで慣れてる!)

空中で好き勝手に踊る四肢を引き寄せ、手で足を抱えるようにして、抱く。

そのまま身を前に傾けると、耳を無駄に涼しくする風を感じ、そして回る。

回る、回る。

そして地面が近づいてきたので腕を解き、伸ばして着く。

硬いアスファルトの感触を握りながら力を込め、それを起点にしてまた、跳ぶ。

数回を回転で刻んだ後、しっかりと着地して前を素早く見据える。

先程のが余程高速で進んでいたのか、幅5メートルは下らない通学路の両端に立つ桜の木から大量の桃色が舞っている。

だが、他には先刻と変わらない、閑散とした空間が広がっているだけだ。

ならば、と僕は“目”を捨てた。

耳に入る風。

木が擦れる音、小さな虫や動物の熱。

そこに、押し殺してはいるが隠しきれないほんのわずかな鼓動を感じ、

「・・・っ!」

落ちていた石を投じた。

がさつという、枝と草を掻き分ける音が響き、同時に影が飛び出した。

目を開けて確認するが、

(・・・速い!?)

何かが茂みから出てきたのは見えたが、一瞬で横の通学路に飛び出してきた、その回避の“終わり”しか知覚できなかった。

そんな尋常とは思えない動きをした影は、驚いたことに、人間の形をしていた。

中肉中背、低くはないが高くもない背丈に、細い目が目立つ別段イケメンでも何でもないごく普通の人混みに紛れるときには便利だなあとしみじみと思うような顔だ。

ハイボンと名付けよう。

「おい待て！吹っ飛ばしたのは悪かったがやけに酷評されてないか!?!」

おや、ハイボンが叫んでいる。

「何か変なあだ名まで既につけられてる気がするんだが!?!」

意外とハイボンは察しがつく方らしい。

うんうんと頷いていると、また音が聞こえてきた。

今度は降ってくるような肉を火で炙る時のような燃烧音。初めて聞く。

はてと思うと、ハイボンが顔を引き吊らせて高速のターンをする。

するとその1秒後ほどで、ハイボンの足元に矢が突き刺さった。

いや、違う。

矢ではあるが、僕は爆炎を素材にした矢なんて知らない。

しかもそれは膨張し、弾ける。

「やべっ!」

しかしハイボンは驚異的な速度で右へと身を飛ばす。

結果、火の矢は誰にも当たることなく爆散した。

いよいよ混乱が極まってきた僕だが、ハイボンは更に顔を歪ませると、

「おい！お前、何年何組だ？」

「へっ？」

突然の疑問に驚くが、送られてきた手紙を思い出すと、

「ええと、まだ決まっていらないそうです！ただ2年生としか！」

「転校生か。それなら後で謝るから、それまで待っていてくれ！」と、そう叫び返すと、彼は身を翻し、

「じゃあな！」

学園の方へ走って行ってしまった。

・・地面を蹴ったところまでした見えなかったが。

「あーもう、また逃がした！これで何回目かしら・・・」

気ままに呆然としてしていると、そんな声と共に、スーツ姿の女性が走ってきた。

振り返ると、女性でありながら高い身長、大きいがきりつとした目が美しさというよりは爽やかさを感じさせる顔立ちをしていた。

彼女は僕の隣までくると、何故か煙が上がっている手を振りながらため息をつき、

「あのヤロ、HRで会ったら覚えてなさい・・・」

といささか人格を計りかねる発言をした後、ふと気がついたかのようになら振り向く。

首を傾げ、

「？ えーっと、見ない顔ね。もしかして、今日くるっていう新入生くん？」

若い年上の女性から話しかけられたことはないのです、少しどきまぎしながらも、

「あ、はい」

と答えた。

それを聞いた(多分)先生が、笑顔になって手を合わせて、

「あーよかった。いつ来るかわかんなかったから、探す手間が省けたわ」

「は、はあ・・・」

気の抜けた生返事しかできず、少し反省する。

しかし先生はそんな僕を気にする風もなく、先ほどハイボンが隠れていた茂みに近寄り、何かを探す。

「ところでさー」

と前置きしてから、先生は手に石を持ってこちらに見えるようにして掲げる。

「これ投げたのって、君？」

「あ、はい。・・・ってああ！すいません、ついいつもの癖で！」

「違う違う、別に投石を責めたわけじゃないわよ」

苦笑しながら言われ、ほっと胸を撫で下ろす。

先生は何が楽しいのか、指に挟んだ石をしげしげと見つめる。

「ふーん・・・。これは、楽しみな子が入ってきたわねえ」

「は？」

意味が分からず、思わず間抜けな返事をしてしまう。

「あー、いいのいいの、気にしないで」

そう言われたら黙るしかない。

「さて、随分と型外れな感じだけど・・・。とりあえずは君、」

「入学、おめでとう」

## 転入、でも一騒ぎ

先生に連れられ、しばし無人の通学路を歩く。

しかし、見れば見るほど、大きい学校だ。

元々、実家より大きな建物をあまり見たことはなかったが、それでもこの校舎の巨大さはしつかりと分かる。

見あげれば、てっぺんにある時計が辛うじて確認できる。

横を見れば、どこまで続いているのかは、統一された壁の色彩のせいもあり、ぱつと見ただけでは把握できない。

(これから、ここで生活するんだ・・・)

そう思うと、身が引き締まるような、腹の底が冷えるような緊張感に襲われる。

そうしているうちに、玄関が見えてきた。

「わぁ・・・」

入ると、思わず感嘆の息をもらす。

数十メートルほどの横幅に、大量の下駄箱。

正直ここまで数が必要なのかと思わなくもないが、そうゆうものなんだろう。

そう納得していると、前を歩く先生が首をかしげ、

「毎回思うけど、この下駄箱って、無駄よねえ・・・」

・・・そうゆうものなんだろう、うん！

自分でもよくわからない勢いで無理に頷きつつ、先生に促されるまま『2-K』というプレートが付いている下駄箱に靴を入れる。

腰から下げていたポーチから新品の上履きを取り出し、履く。

「ぬ・・・」

・・・なんだろう、このフィットしているようでキツイような動きや

すいようなくいような。

片足を上げ、感触を確かめるようにして足首を回す。うぐん、とつかの間唸る。そうしていると、視界の端を制服を着た人影が通り過ぎていく。少し目を凝らしてみると、緑の腕章を付けていた。

何だろうな、と思ったが今はこの上履きだ。

(一言で表すと慣れないなあ・・・)

まあ、それもこれからどうにかなるのだろう。

そう思っつて、微妙に苦笑して僕を待っている先生の方へ歩いていった。

本当にこの学校は、どこまで広いんだろうか。

先ほど階段を3階分上り、教室が並ぶ廊下に出たのだが。

建物の中なのに、どうして壁が見えないんだろう・・・。

呆れとも驚愕ともつかぬ感じで渋い顔になっていると、先生が『2

- K』と書かれたプレートがドアの上の方に付いている教室の前で止まり、

「ん、じゃあちよつと待っててね。紹介するときになったら呼ぶか

ら

「は・・・はい」

自分でも緊張で震えた声だと思っつてしまった。

わずかに頬が赤くなつていゝるのも分かる。

そんな僕を安心させるように、先生は爽やかに笑つて、

「大丈夫よ！このクラスの連中は基本的に頭おかしい奴らばつつかだけど、楽しいわよ？」

そう言われ、

「はい！」

今度は元気に返すことができた。

よしっ、と先生が笑顔で頷いて、ガラツとドアを引いて教室に入っていた。

先生がドアを抜けて教卓に上がると、わいわい騒いでいた音が静まる。

『よし、おはよー。じゃあ皆いるわね?』

『沙那雪先生、クサミチがまだ来てません。正確に言うと先生に火槍飛ばされて窓から逃げて行ってから戻ってきてません』

『あんにやる、まだどっかで隠れてんのね。。。じゃあ正富、何か報告受けてる?』

『えー、「聖域で待機なう」だそうです』

『要はいつもの腹痛ね。まあそれならいいわ』

内容からして微妙な会話だが、いつものことらしく、教室は静かなままだ。

先生の声がよく通る。

『今日はビッグニュースがあるわ』

『なんだと? ざわ・・・』

『興味深いな。ざわ・・・』

『あんた達口で効果音入れないの。さてまあ、面倒だから単刀直入に言うわね。・・・転入生よ』

おおおー!!!

今までの静寂さはどこにいったのか、沸き上がったかのように話し声と歓声が起こる。

『男か! 野郎か!? だったら興味ないぞ!? どんな奴だ一体!』

『おお同志よ! 素晴らしく言動が矛盾しているぞ! 落ち着けなさいつて!』

『慎太郎とか佐助に続く戦闘系だといいいね。クサミチとか“道士”みたいな人多いからさ。このクラス』

『落ち着きなさいあんたら。．．ま、期待していいと思うわよ？ちなみに男ね？』

一瞬で男勢の会話が止まった。

教壇の先生が額に手を当て、

『ただ素直なのよあんたら．．。まあいいわ。入ってきてー？』

呼ばれ、一度ゆっくりと深呼吸をする。

大丈夫だ。何度も練習してイメージトレーニングまでしたじゃないか。さっきの会話は想定できなかったけど。

(うん、．．大丈夫)

内心で確認をとって、現実で頷いてからドアに手を掛けた。

教室に足を踏み入れると同時に、ざっ！

大量の視線が僕を射ぬいた。

思わず身がすくむ。視線の中には、品定めするようなもの、体の動きを一つ一つ追うようなものがあり、それらが混ざり合って不可視の威力を生む。

でも、そんなのに怯えているようではダメだ。

キツと前を向き、手招きをしている先生のところまで進む。

先生の隣までくると、先生が生徒たちに向かって控えめに声を張る。

「はいはい、そんなにがつつり見ない。気になるのはわかるけどね？」

だが、視線が軽くなった気配はない。

先生が苦笑して、チョークを僕に手渡す。

「じゃ、これで黒板に名前書いてね？後は自己紹介お願い」

「はい」

先生が少し動いて、黒板の真ん中のスペースを開けてくれる。会釈をしながらチョークを黒板に立てる。

カツカツカツ

チョークが黒板で削れ、白い軌跡を残す音が、静まった教室に響く。

「・・・ぬ？」

書きにくいな、これ。

ここを、こんな感じに引いて、上げて、はねて・・・ああっ、もう。消して消して。

今度はこう、サツと伸ばしてタツタツて払って。

よし、次はこう、ダダダツてやってシュババーっと・・・ぬお、ミスった。

消して消して。

40分ほど経った頃だろうか。

黒板には 木 仙 と物凄い達筆で書かれた文字があった。

先ほどとは別の意味で静まり返る教室の中、汗を額に浮かべた少年

が満面の笑みで振り返り、

「木仙もくせんです！どうぞよろしく！」

「「「長いよ！」「」「」

総ツツコミを受けた。

## 質問、それと奇襲。

そんなこんなで、とりあえずは自己紹介・・・できたのか・・・な・・・？  
ま、まあ過去のことを悔やんでいても仕方ない。  
とりあえずは前を向こう。うん、そうしよう。

「それじゃま、空いてる席は・・・」

先生が半目気味になつて生徒達を見回す。

「・・・うん、正富の隣が空いてるわね。木仙君、あそこに座つてくれる？」

「あ、はい」

こちらに奇異の視線を向けてくるクラスメイト（予定）の脇を抜けて、正富と呼ばれた少年の所へ歩いていく。

頭にバンダナ、少し彫りが深い顔立ちがハイボンとは違う、知的な鋭さを感じさせる。

僕が「よろしくお願いします」と一会釈すると、

「うん、よろしく」

と、にっこりと笑つて返してくれた。

少し近寄りがたい雰囲気だったが、そうでもないようだ。  
少しホツとする。

僕が席に座ると、先生が時計をチラツと見てから、

「はいじゃ、だいぶ遅くなつたけど連絡事項ね。特に無し。今日は2学期の始業式だったから、このあと特に何も無いわ。自由解散よ。じゃ、日直？」

「起立！」

一番前の席の少年が凜とした声で叫ぶと、皆が素早くザツ！！と立ち上がる。

僕も慌てて立ち上がる。

「礼！」

「「「ありがとうございます！」「」」

「あ、ありがとうございました！」

少し遅れてしまったのは仕方ないのだろうか。

先生が、「クサミチいつまでトイレに籠ってるつもりかしら・・・」  
とため息をつきながら教室を去ると、僕は転入生恒例イベント、  
質問攻めにあっていた。

「ねえねえ！趣味は？」

「え、ええと、釣りとか、かな・・・？」

「能力は何て言うんだ！？」

「う、それは」

「彼女とかいるの？」

「い・・・何で刀とか出してるんですか？というか何で持ってるんですかそんなもん！？」

「あ、知らない？購買で売ってるよ？」

「うっそお！？」

「そんなことよりもさ、特技は？」

「り、猟と的当てです」

「猟！？へえー、そんなことしてるんだ！！」

「そ、そんなことよりボクはスリーサイズが知りたいんだな！」

「測ったことありませんよ！？」

「あーたら」

「こーたら」

だ、駄目だ・・・。

質問多すぎるし、変な質問也多すぎる・・・！今だに殺気感じるし！

いない、彼女いないよ!?!?  
そう、僕があたふたしているよ、

「転入生はここかあああああああ————!!!!」

教室のドアが蹴破られ、すごい勢いで男が飛びかかってきた・・・  
てええ!?!?

「くっ・・・!!!皆さん、逃げ・・・」

・・・てるよ、速いよ!?!?しかもすでに取り囲んでギャラリー化し  
てる!?!?

だが、そんなことを気にしてられない。

頭に、全身に、“魔力”を集中させる。

イメージとしては、血管をもう一つ増やし、それを意識的に活性化  
させる。

そうすると、

(・・・見えた!)

先ほどまでは霞んで残像らしき“跡”しか見えなかったが、今なら  
ば相手の輪郭が、動きが、体格が、すべてはつきりと見える。

“思考高速”と“視力矯正”だ。

師匠から最初に教わった技術で、最も基本的なもの。

それらは僕に判断と実行の時間を十分にくれ、  
（・・・よし！）  
踏み込んだ。

視界の中、敵は大幅に跳躍し、机を飛び越えて、拳を振りかぶっている。

このままだと、3秒もしないうちに直撃だろう。  
だが、それだけあれば十分だ。

「・・・ふ」

呼吸を深め、肺に空気を取り入れる。

慌てていて乱れた足を組み替え、左足を踏み込み、右足は離して平  
行に。

シンプルな構えだ。

そして、そのまま、

「・・・喰らえやオラア！」

拳が僕の眼前まで近づく。

風を切りながら喰るそれを、ぎりぎりまで引きつけ、

「・・・！！」

首を僅かに捻ってかわす。

それと同時に、両腕を素早く上げ、放たれた腕の手首、肘のあたりを  
掴み、右足を軸にして向きを変える。

思い切り両腕で敵の腕を引っ張り、その方向に左足を再度、強く踏  
むこむ。

「・・・っ!?!?」

敵が息を飲んだ気配がするが、そのまま体を回して、肘を掴んだ手  
を振り上げ、

「・・・っせい！」

投げた。

床に激突し、鈍いようで破裂のように激しい大きな音が響く。

その一部始終を見ていた木仙のクラスの生徒は、少し驚いたように眉を上げる。

ゴーグルのような眼鏡を首から下げる少年が、楽しそうな声色を上げる。

「今の見た？あんま相手も本気出してないけど、ドツキリの奇襲に對してエセ背負い投げしたよ？結構やるんじゃないかな、木仙君」それに周りの少年が頷き、

「少し動き見てたけど、ありゃあ格闘系でも十分通じる感じだな。近接タイプじゃないか？」

「でもでも、まだ判断はできないよ？頑張れば身体能力上げるだけで今みたいなのもできないわけじゃないし」

「だな。でもまあとりあえずは」

うん、とその場にいた全員が頷く。

「・・・さっきのやつの後ろからうじやうじや追加来てるけど、大丈夫かな・・・？」

## 逃げて、ついでに決着。

「ぬおおお!!」

何これ!? 何で追いかけられてるの僕!?

慌てて教室を飛び出してきたけど、今自分がどこを走ってるのかわからない!

く、チラホラ『購買』とか『職員室』とか見えたから、教室とかからは離れてるみたいだけど・・・。

そう困惑しながらも全力で走り続けていると、背後からの大量の足音と共に、怒声が僕の背中を叩いた。

「おい! 待てやコラア! 何で逃げる!」

日本刀とか持ちながら追いかけられたらそりゃあ逃げるんじゃないかな普通!?

「・・・だああ塚があかねえ! 食らえ!」

「え?」

視界をよぎる生徒や壁とは別の、見慣れた光が僕の視野にまで届く。赤色、つてことは・・・!!

走りながら後ろを向くと同時に、男達の最前列の人が手から赤い光を発しているのが見えた。

ファイアボール  
「火球!」

彼が叫び、何かを投擲するように腕を振ると、手のひらサイズの火の玉がこちらをめがけて放たれた。

「げっ!?!」

学校で撃つなよそんなもの!

そう突っ込む暇もなく、火の玉は僕へと迫る。

若干揺れる視界で軌道を確認し、軽く横に飛んでそれを避ける。背後から舌打ちが聞こえ、ついでにこんな声も聞こえた。

「避けるんじゃないよ!?! 当たらねえだろ!?!」

「ケガするわー!?!」

思わず振り向いて叫ぶと、

「・・・っげ！」

今度は8人くらいが手から光を発していた。

(・・・逃げる！)

そう決意し、足を魔力で強化しつつ全力で廊下を突っ走った。

「ぜえ、ぜえっ、・・・はあ、はあ・・・」

どれくらい走っただろう、すでに呼吸は乱れに乱れ、肩で息をしているような有様だ。

「くそっ・・・」

悪態をつきながら背後を確認すると、何人かは減ったが、まだまだ9人くらいが健在だ。

(無駄な体力を・・・！)

そう思っても今はどうしようもない。

しかし、このままだとじり貧だ。

というか、

(あれ？そもそも何で僕、追いかけてるの・・・？)

無言で思考し、背後へ質問する。

すると、

「ああ!？」

と前置きが入り、

「んなもん、転入生おまえの実力が知りたいただけだ！んなこともわかんねえのか!？」

「分かるかー!?!」

返事は火の玉で返ってきました。

(本当にしつこい・・・！)  
もうかれこれ数十分はすぎている。なのに、やめる気配がない・・・！  
そのやる気はべつのところ、回してほしいなあ！  
と思いつつも解決策を考える。

(とりあえず、このまま逃げてても攻撃が当たったりするようなこととはない。だけど、この学校の構造なんて知らないから行き止まりとかに誘導されても厄介。どこかに逃げ込むにしても、何がどこにあるかなんて・・・って、うわあ！)

考えながら走っていたら、顔のすぐ横を熱が通り過ぎていった。  
冷や汗を流しながらその後を目で追うと、曲がり角から、本に目を落ししながら歩いている人影が見えた。

「あ、危ない！」

そう叫ぶと、

「ん？」

と顔を上げる。

その顔が引きつると同時に、その人の腹に火の玉が激突する。

「ぐほおっ！！」

漫画のように派手に吹っ飛び、壁にその人が大の字に刺さる。

(けが人！けが人でたよ！？)

脳内でつつこみながらも、後ろから迫る集団に捕まるわけにもいかない。なのでその人の横を通り過ぎる。

しかし、気になって振り向くと、『救護』と書かれた腕章をつけた生徒が担架を持って現れ、瞬時に回収して去っていった。

自分の目が点になるのが分かる。

しかも、その後に『改修』の腕章をつけた生徒が現れ、その人が金槌で一回壁を叩くと、巻き戻し再生をしているかのように壁が元通りになった。

ジト目になった。

とりあえず、このまま逃げている仕方ない。応戦しようにも、どう考えてもこちらが不利だ。

だから、

(どこか隠れる場所・・・ないか!?)

必死で周囲を見回すが、水道や清掃用ロッカーくらいしか見あたらない。

ダメか。そう思ったときに、遠目だがトイレの標識が見えた。

すぎる思いでそこに決定し、魔力を一気に高める。

発動するのは基礎系身体向上術、

「<sup>アクセル</sup>加速・・・!!」

僕の走る速度が数倍になり、一息で背後の集団との距離を離す。

慌てて追い上げてくる気配がしたが、もう遅い。

ちよつとした魔法で自分の足音を伸ばし、もっと先に逃げたようにカモフラージュしてから、音を立てないように十分に気をつけながらトイレのドアを開け、中に飛び込んだ。

だからといって安心はできない。

トイレのドアにはスモークガラスがついてあり、うつすらとだが人影くらいは確認できるようになっている。

万が一それを見られたら、ドアを開けて中を覗かれないとも限らない。

個室になり何なりに隠れる必要がある。

足音を消し、疲労した体に鞭を打って壁際の個室に目を付ける。

ドアを直接開けて入ると音がでるし、第一そんな時間はない。

軽く飛んで、壁を蹴って個室のドアの天辺に着地する。

そのまま降りようと視線を下げると、

「……………」  
「……………」

朝に会ったヘイボンと目が合った。

「……………」  
「……………」

お互いが何も言えずに固まっていると、外から

「影が見えるぞ！ここにいるかもしれない！」

と声が聞こえてきた。

しまった、と思うが時すでに遅し。

バンツ！！とドアが蹴りで開けられ、

「いたぞ！」

見つかってしまった。

息を呑み、そのわずかな隙に男たちが手を振り上げ、

「これで終わりだ！食らえ！」

その手に光を灯す。

(逃げられない…！？)

諦めかけた瞬間、ジト目のヘイボンがぼそつと、

「あーあ、やっちゃったなあ…」

と呟いた。

しかし、それがどこか僕に向けられたものではないと気づき、疑問  
の形に眉を上げる。

それに構わず男たちは腕を降り下ろし、

「これで最後だ！火球ファイアボール…！？」

「はっはっはー！正義ジャスティの拳パンチ！！」

妙にハイテンションな男の声と共に吹っ飛ばされた。

(・・・え?)

と疑問する。

外からは、

「ひ、ひいつー!じゃ、正義男!」ジャステイマン

「はっはっはー、いけないなあ君たち。トイレでの戦闘行為は御法度だよ?どれ、そんな君たちに僕の正義講座を聞かせてあげようじゃないか!」

「い、いやだあ!!!5時間もそんな話に付き合わされるのは嫌ー!」

「はっはっは、大丈夫だよ。僕もせつかくの授業がない日、早く帰りたいしね。・・・3時間で済ませてあげよう」

「っっい、いやあー!」

「はっはっはっはっは・・・」

ハイテンション笑い声が男たちをひきずる音と共に遠ざかっていく。呆然とする僕。

そんな状況で、ハイボンはため息を一つ吐いた。

「とりあえず、そこから降りてくれないか?」

## ただ今説明中

慌てて木仙は扉から降り、数分してからハイボンと呼ばれる（そう呼ぶのは木仙だけだが）少年が出てきた。

木仙に関してはあまり必要はないが、とりあえず二人で手を洗う。

丹念に爪の間まで水を入れて洗うハイボンに、先にハンカチで水滴を拭いている木仙が話しかける。

「えっと、へ・・・まずお名前をお聞きしていいですか？」

「・・・今何て言いかけたんだ？まあいいや、俺は風浦かみづり 草路くさろ。周りからはクサミチなんて呼ばれてる」

「クサボンさんですね。僕は木仙と言いますどうぞよろしく」

笑顔を向ける木仙だが、対する草路は思い切り口元を下げ、眉を歪めた顔で返した。

そのまま数秒固まった後、木仙が何事もなかったかのように、

「草路さんですね。僕は木仙と言いますどうぞよろしく」

「・・・まだまともな奴が入ってきたと思ったのに・・・」

「にしても、さっきの人って一体どういう方なんです？」

そのまま続ける木仙。

数秒くらい信じられないものを見る目で草路が動きを止めていたが、やがて諦めたように口を動かす。

「あー、どっちだ？・・・ああ、どっちもか。えっとな、さっきの集団は無差別に新しいことを発見するとそこその人数とそこその戦力でそこその迷惑を提供する即席団体『穴掘り』だ。あれは別に悪意あつてのことじゃないから気にするなよ？ちなみに特定のメンバーもいないがハイエナ並の速さで嗅ぎつけてくるから七不思議候補だ」

「ええと、さつそく理解が追いつかないんですが、じゃあさっきの男の人は？」

「ああ、あれは『正義男』ジャスティマン。風紀委員でな、あいつが正義と見なし

たものを踏みにじると高速で飛んできてパンチだ。たまにキック。俺でも避けるのに苦労する。あ、個人で適う相手じゃないから刃向かうなよ?」

「は、はぁ……。本名は?」

そう聞くと、草路は何故か一瞬無表情から真剣な顔になり、数刻後、

「……さあ?」

「どうなってるんですかこの学校……」

「あゝ、俺と同じクラスか。よろしくだな」

「はい。……そういえば先生が呼んでた気がしますが、大丈夫なんでしょうか」

「そうなのか?ん、まあ後でな。それよりも、今朝はすまんかったな。今度何かおごらせてくれ、それでいいか?」

と廊下を歩きながら草路が聞くと、慌てて木仙が手を横に振り、

「い、いいですよそんなもの」

「それだと俺が困るんだが……あ、そういえば」

話を一旦止め、少し首を傾げて、

「お前、これからどこに住むんだ?」

「へ?」

思わず間の抜けた返事をしてしまったから、

「えゝ、と……」

と言葉を先延ばしにして、「うゝん」と思考にふける。

「……」

「……」

歩きながらの沈黙が続いたが、やがて木仙が冷や汗を流し始め、

「……まさか、決めてないの?」

「……考えてもいませんでした」

それはどうなんだ、という草路の最もな質問に対し、若干泡を食った感じの木仙が焦り気味に説明を始めた。

ええとですね、と前に置いてから、

「あの、生まれも育ちも北の田舎の山奥で、殆ど人が一人もいない中で動物とかを狩りしたりして生活してきたんですよ。生活の知恵とか体術とか能力の使い方とか全部師匠・ってええと僕の保護者みたいな人に教えてもらって、1週間くらい前にこの学校からの手紙が来て初めて山を降りた所存で。で、でもよく考えてみたらお金とか一切持つてませんしこっち来たら自動的にどうにかなると思つてたんでつまりええと」

「要するにノープラン・ノーマナーってわけか。でもなる程な、狩りで生活、か。どおりで・・・」

何やら納得したように頷いている草路に、結構な錯乱状態の木仙が、「どどどどどうしましよせっかく新生活ヒヤッホイとか言つてたのにさっそく野宿ですかあでもこっちの地面って冷たいのかな都会の土は厳しいぜ」

「まずは落ち着け。でもそうか、うん・・・まず、本当に一銭もないんだな？」

がくがくと首を横に振る。

「知り合いとかは？その師匠つて人はこっちには？」

いない、とうな垂れる。

「能力者が国から支給される金は？」

受け取ったことがない、と頭を抱える。

「そもそも銀行・・・というか口座持つてるのか？」

多分ない、と愕然とする。

「そうか。これから開くとなると、特例でも一日以上はかかっちゃうな・・・寮に入るにも金が必要だし、でもまあその辺はどうになるか。最低限の荷物は持つてきてるよな？」

それはまあ、とようやく頷く。

「なら数日くらいは大丈夫か。なんなら俺が貸してもいいし。でもそうになると他の生活必需品とかが問題だな。・・・っと、ん？」

そこで少しだけ顎に指を乗せ、すぐにポン、と手を打ち、

「ああなんだ、これがあつたじゃないか」

最早立ち止まってガタガタ震えている木仙をよそに、草路が指を鳴らす。

すると、草路の頭辺りの高さのところに、電子音を奏でながら厚みがないような光の枠組みが出現する。

震えるのを止めてポカン、と枠、否、画面を見ている木仙。

「おい、徹とついるか？」

そう光の仮想画面に声を投げかけると、すぐに画面が切り替わって首からゴーグル型眼鏡を下げた少年が映し出される。

彼は「はいはい」と言ってから、ニコツとした笑顔で、

『今絶賛隠密活動中だから後にしてくんない？』

「呼びかけに答えてるんならオーケーってことだろ？それより、先生出してくれ」

『にべもないね。まあいいよ？誰先生だい？』

「沙那雪先生だ、頼む」

『あいあい』という言葉を残して、画面が暗転し、再度新しい顔が出される。

今度は爽やかな風貌の顔を呆れ半分怒り十分な塩梅で歪めた女教師が映り、

『HRも私の制裁もサボっておいて“道”直通のコールとはいいい度胸ね。土下座する気になった？』

「あれは素人がやるもんじゃないです。それより先生、今転入生と話してて発覚したことがあるんですが、ええと、」

『長くなるんだったら要約しなさい』

「金がなくて宿無しだそうです」

『そう、確かにそれは問題ね。。。でも私にどうにかできることじ

「やなし」

「俺もそう思ったんですが先生、あの石ありますか？」

『石？あるけど、・・・ああ、そういうことね。臨時収入としては巨額だわ、確かに』

「いいわ、と軽くため息をついてから、

『徹を通してそっちに送るわ』

「助かります」

『いいのよ、あんたのためじゃないから』

「じゃあ、と画面が切れる。」

しかし、そのすぐ後に先生が映り、

『ああそれはそうと、あんた後で職員室に来なさい。説教じゃないから、多分』

「・・・ぐぬ、まあ了解です」

「え、ええと、さっきの何ですか？ハイテク？」

「その辺の説明は後だ。・・・っと、もうすぐ来るぞ」

え？と疑問を重ねるが、草路の目の前に“穴”が開いたのに更に呆然とし、言葉につまる。

草路は何でもないように穴に手を突っ込むと、拳大の石を取り出して、

「さんきゅーな。後で『驚き男チヨコ』でもおごるわ」

すると、穴から先ほど聞いた少年の声が反響を伴って返ってきた。

『あいあい〜』

最早混乱の極地に達した木仙に若干の苦笑を向けながら、木仙に石を手渡す。

「え？この石って・・・」

「まあそれをここに持ってけ。そうすれば解決する」

と、懐から出した学校の見取り図も渡し、踵を返す。

受け取った木仙がしばし硬直していたが、復活し慌てて草路の背に叫ぶ。

「え、ちょ！どこに行くんですか!？」

ああ、と振り向く。

彼の額にはいつの間にか若干の粘ついた汗が浮いており、

「トイレ。」

すまん何か当たったみたいだ・・・」

## ただ今説明中（後書き）

この後から多分、設定を述べる段階に入ると思います。長くなると  
思うのでグダグダになっただけです。．．

## 向かってみたら

どうやって隠してたのか、一瞬で物凄い真っ青になった草路さんは、これまた一瞬で目の前から消えた。  
今朝も思っていたが、尋常ではないスピードだ。

そんなわけで、何だか一日が終わる前だけでも疲労が溜まってきた気がするが、しかしまあ布団に入って日没を迎えられるかどうかも定かではないので、ともかくも渡された地図通りに進んでみる。

「・・・っと、ここかな？」

10分くらい歩いただろうが、看板が見える曲がり角に着いた。

『購買部』と『交換所』とある。

(購買部はいいとして、交換所って何だろう・・・?)

疑問には思うが、今それを考えても仕方ない。進んでみるだけだ。

曲がり角を曲がって、奥。

『交換所』と書かれた、若干古くなった木の看板を見つけた。

足を踏み入れてみると、

「わあ・・・!!」

まず目に入ったのは、色とりどりの装飾。壁に飾ってあるシャンデリア。といっても、どこぞの富豪の豪邸のもののように高級感漂うのではなく、見る者をわくわくさせるような、ガラスのような素材でできたカラフルな照明。

壁紙は薄茶色で、あちらこちらに散らばっている綺麗で光る装飾を少しだけ抑え、どこか落ち着いた雰囲気醸し出している。

そして、目を引くのが壁一面の大きなコルク板に乱雑に縫い付けられている貼り紙たち。

遠目で何が書いてあるのかは分からないが、それだけでもう、こういった場が初めての木仙にとっては足がそわそわしてたまらない。(うわ！うわ！キレーだな！！あれ、何が書いてあるんだろ、うわ！！！)

ここに来た目的も現在の割りりとマズい状況も忘れ、しばし周りを見回す。

そうしていると、

「・・・あれ？君は・・・」

「は、はい？」

はしゃいでいたところを見られたかと思っ、少し顔が赤くなるのを感じながら、振り向く。

すると、黒縁の眼鏡を掛けた、木仙とそう背丈の変わらない少年が、口元を歪め、

「噂の転入生君かな？・・・ぐったいみん！」

そう言われた。

「え、え？」

「いやいやいやいやいや話は色々聞いてるよお木仙君いやまあまだ入学して一日も経ってないから実際は全然聞いてないけどそんなことはいいんだよ。あ、僕はこの学園のつまり特立新世界学校通称“特新”の新聞部部长兼広報部員の神谷かみやだよ。バトルランキングは堂々の263位。って言ってもわからないかはははは

「わからないのは君の頭だよ」ババラッチ「けしかけ屋”。とりあえずはその無呼吸発言はどうにかしたらどうだい」

と言つと同時に拳を振り下ろし、目の前のよく分からない人にストライクしたのは、

「え、・・・あ！確かえつと、正富まひこみさん！？」

「呼び捨てでも構わないよ、木仙君」

今朝の教室で隣になった少年だ。

この、神谷とかいう男に圧されて気づかなかったが、僕の後ろに呆れた顔をして立っていた。

彼は「ぬぐおお・・・」と呻いている神谷をよいしょとどけると、

「さて、ひとまずは改めてよろしく、かな。俺は正富。これから長くなると思うから、うん」

と、手を差し出してきたので、慌てて掴み、

「は、はい。よろしくお願いします」

「ん？・・・うん、よろしくね」

握手を解き、一瞬首を捻った正富だが、「気のせいか」と呟いて半目になり、

「さて、・・・君はいきなり何をしているんだよ」

「いてて・・・ぼ、僕も君にそれを言いたいなあ！結構本気で殴つたでしょグーで！君みたいに頑丈じゃないんだからさ“無痛者”<sup>ラバーマン</sup>！」

「にしても木仙君は何でこんなところに？」

「ええと、くさば・・・いえ草路さんにここに来るように言われて」

「僕を置いて会話するな！・・・！！」

全く同じタイミングで半目になってから振り返り、せえせえ肩で息をしている神谷を見やる。

彼は力強く正富を指さし、「いいか！」と前置きした後、

「僕はねえ、噂・・・になりそうな転入生君に突撃弾丸インタビューして色々聞き出して情報をうへへばら撒くつもりなんだよ！？それを邪魔するとは、・・・誠に君はダメだね！」

「色々と言いたいことはあるが全部ばらしてる君の方がダメだと思  
う」

「え、ええと、正富さん、この人は・・・」

「ああ、これは「これとか言っな！」・・・これは僕達と同じ二年生の情報屋さ。木仙はまだ知らないと思うけど、この学校では些細な情報がそれこそ結構な需要と価値を持つんだ。だからこんな感じで根掘り葉掘り迷惑な取材とかをして情報を売っている奴らもいるわ

けさ」

「そんな言い方はないんじゃないかな!? 僕はただ、敬愛なる僕のために毎日汗を流して頑張っているだけさ!・・ああ僕素敵!」

そのまま、「ああ、ああ!」と自分で自分を抱きしめて叫んでる神谷を心底迷惑そうに睨んだ後、ため息混じりに、

「まあ、こんな感じのやつだからね。ホイホイ付いて行かない方がいいよ?」

「は、はあ・・」

何故だかとても大事なことを教わった気分になった。

## ひとまずの解決

「さてまあ、・・・草路に？何で？」

それはまだ僕も分からない。

が、とりあえずの手がかりとして、渡された小石を出して渡す。

「ん？石？」

少し困惑した様子の正富さんだったが、やがてすぐに「ああ」と頷き、そして息を飲んだ。

それからまじまじと僕を見つめてきた。

「いや、・・・彼が？まさか・・・」

そもそもどうしてここに来るように指定されたのか、僕自身が分かっているから何をどう考えていいのか分からず、若干気まずい心境でいた。

彼はそのままブツブツと独り言を呟いていたが、頭を横にふる。

どうやら結論が出たらしい、行動から察するに諦めたようだ。

それを尋ねてみると、案の定「行ってみれば分かるさ」という答えが返ってきた。

「なあ、さつきから何の話をしてるんだい？」

「あー・・・復活してたのか面倒くさいな」

「今さらつと失礼なこと言わなかったかい？」

「はっはっは気のせいだよ君の頭みたいだね」

「どつという意味だよ！？」

神谷さんが喚き、正富さんが冷静にあしらう。

そんな意味もなさそうな会話を経過した後、ふと正富さんが神谷さんを殴り、

「ん？・・・これってこいつに知られたら面倒じゃないか・・・？」

「ぬぐうおおお・・・ね、ねえ・・・今の、殴る必要、あった、の・・・？」

多分、話の腰を折るためにやったんだと思うけど、正富さんは頭お

かしい人には容赦ないらしい。

腕を組み、天井を仰ぎながら思考を継続してから、

「おい“パバッチけしかけ屋”。もし噂の転入生のすごい情報とかあったらどうする？」

「つてて・・・はあ？何言っちゃってんの？売るよ、売りさばくよ！  
？そして僕の明日のために捧げよう・・・！！」

「お前もう帰れ」

「か、会話の流れおかしいだろ！？君は何故僕に対してだけはバイオレンスなんだい！？」

片手で頭を抑えながら、激しく指を指し上下に振る神谷さん。

「いいのか？俺にそんな態度で・・・」

「はああ！？何を威張ってるの！？はっはっは、・・・僕が君の！どこに！恐れを抱くといんだい！？」

言葉の区切りごとにポーズをきめ、満面のいやらしい笑いで勝ち誇る神谷さん。

「そつか・・・。うん、そつか・・・」

それに対し、正富さんは唐突に指を鳴らす。

パチツ！乾いた高い音が響くと同時に、先程見た、光の枠がめんが正富さんの体の前に現れる。

それに指を当て、素早く操作をすると『CALL』と文字が出て、電話のデザインの上部に『正義男』と文字が出た瞬間、神谷が目を剥き、泡を食ったように跳ねながら、

「ききき君は鬼かい！？ち、ちくしよう・・・！！ここは逃げるが勝ちだね・・・勝ち続ける僕って素敵！！ああ！！そしてその木仙君！！」

「え！？は、はい？」

「君、この学校の資料とか持ってるのかい？無かったら結構不便だよ！？いくら出す！？」

「払うの前提何ですか！？・・・あ、でも今お金が・・・」

「ああ！？」

ちくしょー！と叫んで無意味に3回身を捻り、

「仕方ないなあ！まあいいや、これからもこの“悪報鳩”こと神谷！ご鼻屑にね！」

そう言つて懐から出した小冊子をこちらに投げ渡した後、これまたなかなかの速度で走つて去つて行つた。

とりあえず渡された小冊子を開こうとすると、何冊かが束ねてあることに気づいた。それらのタイトルを見てみると、『注目の猛者ランキング！略してモサキン！』『隠れた名店マップ』『今更人には聞けない解決手段全集』『うそ、私のランキング、低すぎ・・・？』などとあつた。

もちろん理解できなくて目をひそめるが、一部始終を画面の操作をしながら眺めていた正富さんが呆れとは違う色のため息をつき、

「へえ、なかなかいいラインナップだな」

「ほえ？そうなんですか？」

タイトルのイメージだけで考えていたので、正富さんの発言に驚いて間の抜けた返事をしてしまう。

幸い、彼はそれを気にしないで頷き、

「あいつの発行してる情報誌とかはなかなか人気があつてね。あんなんでも、情報屋とかの中では上位の奴なんだ。だから値段も高くなるんだが・・・」

ちらり、と僕が持っている冊子に目を落として、

「・・・それを無料で配つたり、悪い奴じゃないから面倒なんだよな」

「ああそういえば、さっきのつて・・・」

「うん、嘘だよ？」

「ですよー」

電話帳に『正義男』なんて書かないよね、普通。

「さて、邪魔者はいなくなつたし、そろそろ用事を済ませようか」  
「えっと、それなんですけど、僕はどうしたら・・・」

「あゝ・・・とあえず、あそこのカウンターに言つて、草路の名前と石を出せばいいよ」

そんなことでもいいのかと聞くと、大丈夫と返されたので、ひとまずは言つとおりに、ようやく入り口を離れた。

先程から色々ありすぎて気が付かなかつたが、入り口の正面には小さなカウンターがあり、そこに男子生徒らしき人が退屈そうに肘をついていた。

僕がカウンターに着くと、こちらを向き、「らっしやい」とぶつきらぼつに言つ。

言われたとおりに、（噛みながら）草路さんの名前と石を出す。

すると、さっきまで気だるげにしていたのに、急に飛び上がるようにして姿勢を直すと、上ずつた声で、

「ちよ、ちよつと見せてくれっかい？」

石を渡すと、石を握りしめたまま目を閉じて、

「・・・はあ!？」

叫んだ後、慌てたように、今度は額に石を当て、

「・・・マジかよ」

と、驚愕の言をこぼした。

彼はそのまま呆然としていたが、ハツと我に返ると、

「え、ええと、用事はなんだい？換金っかい？」

「え？」

監禁・・・じゃなくて。

換金？

それで合ってるのか・・・でもそれが目的に合ってる気がする。

（都会では小石がお金になるの・・・？）

そんな馬鹿なことを考えながら頷くと、男が唐突にしゃがみ込み、どこからか取り出したハンドベルを振り回して打ち鳴らす。

ガランガランガラン!という甲高い鈴の音に思わず耳を塞ぐが、今



## 流れで解説に住居選択（前書き）

ここから説明が長くなるものかと思えます。

## 流れて解説に住居選択

相も変わらず、ただただ放心していた僕は、てんやわんやのうちにカウンターの男から札束を掴まされ、騒ぎを聞きつけた生徒たちが何やら質問をしてきたり「嘘だろオイ!」「4人目の登場か!？」などと騒いだりして更に混乱を極めていた。

すぎる思いで、額に手を当てて唸ってる正富さんに視線を向けると、苦笑交じりで視線を返された。

そのままかかってくる言葉に答える余裕もなくおろおろしていると、急に入り口付近の生徒がワツと沸いた。これ以上勘弁してくれと涙目で振り向くと、溜まっていた人ごみが割れ、その中から若干顔色が悪いクサボン　草路が現れた。

彼は大量の人に囲まれている僕を一瞬で発見し、「あーすまん」と言いながらかき分け、近づいて眼前に立った。

思わず救いを得た子羊のような感じで見ていたら微妙にバツが悪くなったのか、頭を乱雑に掻きながら「すまん、ここまでになるとは・」と一言頭を下げてから、「場所変えるぞ」と言い放つ。

すると周囲の野次馬が、興奮して騒いでた先ほどまでとは打って変わって、何かを恐れるような面持ちで焦りだし、じりじりと距離を詰めてくる。

が、彼らが飛び上がって僕達を抑えようとするよりも早く、「失礼」と僕を素早く抱えた草路が、

「舌を噛まないようにな!」

その言葉の意味を理解するより前に、ガクンと一瞬で視界が揺れ、目が回るなんて生易しいものじゃないくらいに回る。爛々と輝く照明の光が線となり、人々の顔がぶれ、その明細を確認することもできず、体を強い慣性が襲い、最早僕は意識を保つのに必死だった。

そんな状態が何秒続いたのだろうか、何も考えられず揺らされるが  
ままだった僕はようやく解放された。

「大丈夫か？」

そんな声が霞む意識の中で聞こえた気がするが、頭痛や吐き気、何  
よりも高速化した鼓動のせいで目の前が歪む。

薄れる光の中で、「ちよつと待つてる」という声と淡い緑と青の光  
を見た瞬間、

「・・・はあ！！」

寝起きに冷水をぶっかけられたかのように、急激に意識が回復した。  
目に焦点が戻り、痛いほどに胸を売っていた心臓はそこそこに治ま  
った。

いつの間にか目尻に浮かんでいた涙をぬぐい、誰かに抱えられてい  
るようだったのでそこから降りると、見慣れない草原が目に入った。  
澄んだ空気に、ごく緩く傾いた緑色の地面。

少し辺りを見回せば数本の木があり、吹いた風に揺れる葉っぱがど  
こか落ち着きを与えてくれる。

そんなこんなで一息をつくとき、人の気配を間近に感じて、慌てて振  
り向く。

そこには冴えない顔に苦笑を浮かべたクサボンがいて、

「・・・いやいや待って待て、お前今微妙に失礼なこと考えなかったか  
？」

やはりこのクサボン、そこそこ鋭い。

ともあれ、お互い座ってから状況の説明を求めた。

「あー、説明すればそこそこ長くなるぞ？」

それは構わないとの旨を告げると、彼は、

「説明は苦手なんだがな・・・。」

と控えめのため息をついた。

「まず、さっきのそこから抜けてきたのは、俺がお前を抱えて逃げ  
てきたからだ。それいいな？」

「まさかとは思っていたけど、この人の速度はどうなってるんだ  
ろう。」

「ん、でだ。まずはこの学校についての説明から入るぞ？ 『特立新  
世界学校』、略して“特新”<sup>とくしん</sup>。まだ人々がどこでも、気楽に毎日を  
遅れていた昔とは違って、環境問題が深刻化し、大地や大気が汚染  
されて、地球上の約5分の一が隔離地域になっているこの現代。そ  
んな地域の開拓と改善、特殊な環境により凶暴化して手の付けられ  
なくなった動物達の排除やそれらからの防衛。そんな感じの状況か  
ら生み出されたのが俺たち、・新生児。“第二児”とも呼ばれる、  
えくと、・遺伝子の特殊配合から生まれた、まあトンデモ能力を  
持った奴らだ。力も危険度も応用範囲も実用性も全部違う。それで、  
ともかくそんな奴らを放つとくのはマズいってお偉いさん方が相談  
して、研究の中心でもあったここ、日本にこんな感じの専門の教育  
機関を設けることになった。・まあ最近は『力をつけすぎだ』と  
か何とかで外国のおっさん達がうるさいけどまあいい」

時折、言葉を選ぶように区切ったり、言い淀むように止めるが、そ  
れくらいの方が分かりやすいし、一言をじっくり吟味する時間がで  
きるから助かる。

「こつからが本題だ。さっきも話したが、この学校の主な目的は、  
基本的な人格の形成と、それにとまなう能力<sup>ちから</sup>の制御に応用だ。授業  
では精神を乱さないような訓練をしたり、力が暴走しないように制  
御できるようにしたり、色々やる。んで、それを実戦形式で行うの

が体育。色々ぶっ飛んでも治療系がいるから安心しろ？・とそうじゃない、ええと、まあそんな大義名分のもとに行われてるドンパチなわけだが、実質は生徒たちの娯楽と化しててな。放課後とか休日とか、希望性だったり罰ゲームだったりして集団戦闘や決闘が日々勃発してるわけだ。つと、説明し忘れてた。俺たち“第二児”には、複雑な事情とか人情とか人権とか、その辺からの“侘び”の代わりで様々な待遇措置、学生にしちや莫大な支援金をもらえるわけだ。その代わりに定期健診とかで体差し出すことになるけど。んで、そんな金を大量にもらっても使いきれぬ奴なんてのはなかなかない。そこで自然と始まったのが、『校内順位<sup>ランキング</sup>』や『手配』の制度だ。前者は、簡単に言えば『体育とかでどれだけ実績を上げたか』で決まるな。故にバトルランキングなんても呼ばれるが。後者がちよつと面倒でな・・・」

そこまで言ったとき。  
力の抜けきっていた草路の体に急に芯が戻り、猛然と鋭い視線を周囲へと放つ。

彼はポケットから札のような紙を取り出して、押し殺した声で「伏せろ！」と叫ぶ。

とりあえずそれに従って草原に顔をつけて伏せる。彼も、紙を空へと投げるとすぐにうづくまる。

すると、緑に埋もれてふさがっている視界の代わりに、少しだけ鋭敏化された耳に、遠くからの音が入ってきた。

「おい！いたか！？」

「いや、いない！くつそ追跡術も掛ける暇ねえし！座標特定もできねえし！追跡防止とか気配消去とか使ってるみたいだから搜索もできねえし！」

「全くだ！・・・まあ、」

「「いつものことだがな！！」」

「ならいいか、あつはつはつは！」

「そうだな、あつはははは・・・」

そんなおかしい笑い声と一緒に、気配も遠ざかっていく。とりあえず説明を求める視線を草路に送ると、「これから説明するよ・・・」と視線なのにため息が聞こえてきそうな返事が返ってきた。

札を回収し、改めて座りなおした後、

「再開するぞ？えとな、さっきみたいなのと、交換所でのあの大騒ぎも、さっき話した『手配』ってのが原因なんだ。さっき、多分百万くらい渡されたる？」

「あ、はい」

きりもみ状態で振り回されたが、なんとか手元にある札束だけは死守できた。

「あれが『報酬』。『手配』によってターゲットに認定されている奴を倒すことでもらえる、な」

「え、えーと・・・？」

「ああすまん、『手配』ってのはあれだ、日頃から恨みとか純粹な再戦希望とかを募らせてる奴が報酬の資金として金とか物とかを『交換所』に寄付することで登録される、まあ手配書みたいなもんだな。名前のまんまだ。つまり、戦闘で勝ち続けたりして、ランキング上位に居座っている奴らが主なターゲット。報酬の条件は様々だが、俺の場合は分かりやすいな。『攻撃を当てること』だ」

「ああ、なるほど・・・」

今朝から今までの彼の圧倒的な逃走能力からすると、まず、彼が逃げる前に攻撃のモーションがとれるかどうかさえ疑問だ。でも、

「それ、寄付する人たちには何のメリットが・・・？」

「ん？ないぞ？」

「え！？」

あつさりとなんた返された。

「そうだな、確かに私怨とかだけで基本は無償の寄付だし、別に自分に得があるわけじゃあない。ただ、何て言うかな。博打に近いところもあるんだ、言っちゃまえば無駄遣いだな。自分以外の寄付が集まって見事自分がターゲットを討ち取れば、まあ儲けになる。でもそもそもが、街を単騎で破壊しかねない奴らだ、そんなことは基本、できない。うん、ざっくり表すなら『皆で盛り上がるために』、が最大の目的かな？」

「そ、そんなもんなんですか・・・」

あまり趣旨が分からずに、顔が引きつる。

そんな僕を横目でちらりと見やっつて、わずかに苦笑し、  
「まあやっつてることは馬鹿だよ、それは間違いない。だけどまあ、将来とかがどうなるか分からない俺たちにとっては、あらゆることの目的が『楽しむこと』、だ。どんな時だって騒いで、後の打ち上げで大笑いするのが至福なのさ。・・・っと、長くなっちゃったな。だいたい、分かったか？」

そう聞かれ、話された内容を頭の中で反芻し、まとめ、

「な、なんとか」

それならいいや、と草路は頷く。

「・・・」

「・・・」

さあ。

風になびき、風情と癒しをもって揺れる草の音に、しばし無言となる。

そこから、幾分かが経った後。

早々に溜まった疲れを風に流していた木仙だったが、ふと住居が決まっていなことを思い出す。

(そうだ、お金があっても住む所がないんだ・・!!)  
そう割りと本気で困惑する木仙。

ここでホテルなどの宿泊施設が発想として出て来なかったりするの  
はさすがの世間知らずだ。

いや、本人もその存在は知っているが、焦りと同時の混乱でそこに  
まで至られるほどの冷静さは残されていない。

そんな木仙を見て何を思ったか、苦笑を微笑みに変えると、

「あー、そういえばな、木仙」

「何ですか？今絶賛野営のチャンスなんです」

「野宿したいのか？・・いや、お前、しばらくは俺のところで住め」

「はあ、・・・はあ!？」

「いや、それがな、さっき沙那雪先生から言われてな。しばらくは  
世話を見てやれ、だってさ」

まずは混乱を深め、暴走気味に思考を振り回す木仙。

それを説明を続けながら、横目で見ている草路。

端から見れば、ただの変な二人組。

だが何故だろう、彼らのもつ独特の雰囲気はお互いを喰い合い、己  
の色を浸透させていくようで、しかしそこで新しい色を生み出して  
いるかのような。

案外、お似合いの二人組なのかも、しれない。

## 普通玄関の近くは、潜伏

草路に連れられて、草原を出る。

そのまま進み、住宅街を抜けて、更に奥に。

ちなみにそこで確認したが、先ほどの草原は学校の後ろにあったようだ。

ほぼ一瞬でそこまで移動したので、追跡したきた生徒が二人くらいしかいなかったのも頷ける。

と、そう疲れた頭でぼやいていると、少しだけ寂れた雰囲気のマンションが見えた。

後で聞いたが、正確にはマンションではなく、学生用のアパートらしい。

学校からやや離れた位置にあり、どこか虚ろな空気が漂っているの  
で、ここの変に住んでいる人はあまりいないようだ。いるとしても、  
基本的に静かな人たちばかりだとか。

とにかく、二階建てのアパートのドアを開け、「期待はすんなよ？」  
しません。

足を踏み入れる。

お邪魔します、と若干強張った声で言い、玄関らしきところで靴を  
脱ぐ。

・・・そういえば、下駄履きだったはずなのに、いつの間にか最初に  
下駄箱で脱いできた靴になってる・・・。多分、草路さんがやってく  
れたんだらうけど。

パチ、と電気のスイッチが押される。パツパツと数回の点滅の後、  
強くはあるが目には優しい光が部屋の中を照らし出す。

ざっと見回した感想は、普通だ。

何がどう普通なのか、と聞かれると困るのだが、全体的な感想はいたってノーマル。

2LDKほどだろうか、大人が数人集まって騒ぐ程度なら問題はなさそうだ。

黒や灰色、茶色などで統一されたソファなどの家具。学生にしては質素すぎるくらいだが、逆にこれくらいの方が彼らしいかもしれない。

リビングは大体そんな感じだが、部屋の奥から漂ってくる強烈な『一人暮らし』の臭いが、その中の惨状を見ずとも伝えてくる。

あえてそこは気にせず、もう少し好奇心に任せて目を忙しく動かす。ソファや小さめのテーブルを除けば、後はやや旧式のテレビがあるだけ。一応、申し訳程度にタンスがあるが、埃がうっすら積もっているところを見ると、全くをもつて使っていないらしい。

寝室はなさそうなので、リビングが彼の部屋で布団をひいて寝るようだ。

うんうん、と確認をあらかた終えた僕は、さっきからずっと玄関で突っ立っていることに気が付いた。

案の定、後ろを振り向けば、苦笑に頬を歪ませた草路の顔があり、慌てて、

「す、すいません!」

「いや、まあいいよ。初めて見るんだろ、こいつの?」

そう返されると何とも言えない。

それから、逃げるようにして靴を揃え、とりあえずリビングに入る。ギクシャクする体を抑えるために勢いをつけてソファに腰を降ろす。だが、

「?どうしたんですか草路さん?」

草路が動いていない。

彼は目を少しだけ細めると、

「悪い、そこにある筒、投げてくれるか?」

タンスの上に鎮座している、赤色の筒のような物を指差す。それを取ると、

「その紐を引っ張って、そうそう、ぐいっとな。んでこっちに軽く投げた。」

僕の手から放たれたそれは、緩やかな放射線を描くと、急に火花を起こし始める。

バチバチバチィッ！と大量の赤い光を放ち、それに押されるようにして加速。

呆然とする僕の耳に、何かが動いたかのような音が聞こえたが、それを確かめる前に、筒、否、小型ロケット花火は夏の祭りを思わせる光を見せながら、草路さんの頭に向かって突進する。

玩具かとも思ったが、かなりの速度だ。銃弾と大差ないのではないか。

しかし、草路はそれを首を捻るだけで回避する。

ロケット花火が何も無い空間を貫いたのもつかの間、急に己の軌道を上へと変えると、ある程度まで上昇し、爆発した。

火薬が焼ける独特の匂いと、大気を震わせる衝撃波を残して、ロケット花火は霧散した。

僕は抗議の声を上げようとしたが、すぐに気づく。

草路さんの後ろ、つまり入り口の通路に、漫画のように煤けた格好でぴくぴく痙攣している影があることに。

草路さんはしゃがみこむとその人をつつき、

「おい起きろ徹。寝てる場合じゃねーぞ」

「そ、そうしたのは誰かなあ・・・」

「俺だよ？・・・分かったらさっさと起きろ」

「き、君もいい性格してるねえー!？」

そう叫んだ人は、げほげほむせながら立ち上がり、

「ふ、普通人に向かって戦闘用小型花火を投げるかなあ!？違うよ

ね!？」

草路さんは呆れの一言を顔に出しながら、

「わざわざバカ高いステルス符を人の玄関で使うなよ」

「いいじゃんー、うまく盗聴できればその倍の利益になるんだからさー?」

大体さあ、と徹と呼ばれた男はテンションを上げて、

「昼間に先生に繋げてあげたんだからさー、これくらい多目に見てよ!」

「おごりでチャラにするって言ったろ。それに昼間に隠密とか言ったのはこれかよ、どんだけ張り込んでたんだよ」

「いやー、手が疲れたよ。壁に張り付くのって大変なんだねえ」

そう納得したように頷く徹さん。

よく見れば、ゴーグルのような眼鏡を首から提げている。昼間に僕が教室で襲われた時にいた人だ。つまり、クラスメイトということになる。

なんだか個性的な人が多いなー、と半ば現実逃避のように思う。

草路さんが今日で何回目になるか分からないため息をつくと、

「んで、用件はそれだけか?」

「あー、そうだね・・・」

頷きかけた徹さんだったが、何かを思い出したのか、慌てて首を横に振る。

「忘れてた!えと、主に2年の奴らが逃走戦をやらさないか、だって。

明日ね」

「ああ?新学期早々にかよ・・・面倒だな」

が、僕の方にちらつと視線を向けると、

「・・・分かった」

承諾した。

場所や時間などのやり取りをした後、徹さんが「それびや帰るね」と言い、身を翻す。

それから、僕の方に手を振り、

「じゃあねー木仙君。また明日」

慌てて手を振り返す。

それにはにかむと、彼は今度こそ、帰っていった。

## 見学から授業へ

扉を閉め、一息ついた。

リビングへ入ってきた彼に、先ほどの徹さんのことを尋ねる。

ああ、という相槌から始め、

「あいつは“道士”<sup>クラフター</sup>。詳しい説明は省くけど、稀有なレベルの能力者だよ。あんなんでもな」

「はあ・・・」

道理でかなりの魔力を感じたわけだ。

まあ、それはこの草路さんも同じなわけだが・・・。

そんな僕の思考を察したのか、草路さんは苦笑を濃くし、

「俺は大したことない。・・・それより、夕飯はどうする？」

そう言われて窓を見ると、すっかり暗くなっている。

「あ、じゃあ僕が作りますよ」

「いや、今朝からあんなんじゃ疲れてるだろ。美味いかは保証しないが、俺が適当に作る。待っててくれ」

と、キッチンへと行ってしまった。

むう、と少し消沈するが、好意を跳ねのけるわけにもいかない。

とりあえず、その辺の本を読む許可を得て、待つことにした。

「ほい、お待たせ。名付けて『冷蔵庫にいつの間にか入っていた賞味期限がよくわからないものを不安だからとりあえず火にかけた炒め』だ」

「なんですかその不安を煽る料理名・・・」

でもまあ、見た目は普通の野菜炒めだ。

胡椒ベースなのか、強い香りはしないが、妙に食欲を刺激する独特のものを出している。

ごくり、と唾を飲み込む。

忘れていたが、昼から何も食べていない。

少し多めに盛られた、白く輝くご飯を同じく輝く瞳で見ていると、

「・・・先に食べていいぞ?」

そう言われてしまう。

しかし欲望に従うことにし、断つてから、

「いただきます!」

箸を進めた。

「ふう〜・・・お腹いっぱいです。ご馳走様でした」

彼の料理の感想は、素直に美味い。

繊細というよりは大味だったが、薄めに仕上げられた素朴な味わいが不思議とご飯に合う。

だから、

「お粗末さま。・・・しっかしご飯6杯とは・・・なかなか食うな」

「そうなんですか? 師匠は10杯は普通でしたけど」

「まあ食う奴は食うからなあ・・・」

さすがに片付けは無理にでも手伝いさせてもらい、食後のお茶を楽しむ。

「さて、寝るか。・・・風呂はどうする? 今からだと銭湯は混んでるかもしれないが」

「あー・・・」

数秒考えた後、

「今日はシャワーくらいでいいです。この部屋ってシャワー付いてますか?」

「ああ。一応申し訳程度の湯船もあるぞ。湯、入れるか?」

「遠慮します」

そう断って、僕はおもむろに立ち上がる。

そしてシャワーを借りる旨を改めて告げ、湿気が多く含まれている扉を見つければ、そこに入った。

服を脱ぎ、すこし汗ばんだ肌が外気にさらされたところで、ふと手が止まる。

(あ、そういえば・・・)

その時、図つたかのようなタイミングで扉がノックされ、閉まったまま声だけで、

「なあ、着替え、・・・持ってないよな？」  
すっかり忘れていた。

結局、もらった札束の一枚を抜き取り、近所の安い服屋で寝間着と数日分の下着を揃えた。

不備があるといけない、ということ草路さんが付いてきてくれたが、案の定、下着コーナーに向かおうとした瞬間に真っ青になり、購入方法を確認したところで「すまん」と全力で走っていった。

(どうしてあんなにお腹壊すんだろう・・・)

師匠も自分もあんなに頻繁に腹を下さないが、これも単に世間知らずで皆はそうなのだろうか。

うーん、と一人唸る。

僕の一般人、というより他人のイメージは基本的に師匠から形成されているが、なんとなく理性が「あの人は参考にしちゃいけない、いけないよ!？」と熱心に叫んでいる気がするので判断がつかない。比較的常識人ばい正富さん辺りに聞いてみようと思つて、初めての買い物にどきまぎし、無事に購入を終えた。

まだ若干顔が青い草路さんと合流し、再び帰宅。

今度こそ温水で身を清めようと意気込み、奮然と脱衣。

先ほどと同じくらいまで脱いだところで、再度ノック。

「入っていいか？」とのことだったので、「どうぞ」と答えた。

何だろうと思っただが、洗濯カゴや洗濯機、シャワーの使い方までを懇切丁寧に説明しようとしてくれたが、苦笑で軽い説明に留めてもらう。

心遣いは有難いが、さすがにそこまで常識知らずではない。

見かけによらず過保護かもしれない・・・と草路さんに対する見解を深めていると、ふと草路さんが僕の胸元を見つめる。

正確には、胸から下げている、小さなペンダント。

紐の先に紫の宝石がついたシンプルなものだ。

彼はそれを見て若干目を細め、

「それ、えーと、普通のネックレス・・・だよな？」

「さあ・・・？」

「・・・さあ、って？」

「いえそれが、これ、家を出る前に師匠からもらったものなんですよ。何でも、『ちょっとした間だけはそれ付けてる。面白いから』とか何とか。多分よからぬことでも考えてるんでしょうが・・・」

「ふん。ま、いいか。じゃ、何か困ったことあったら呼んでくれ。微かに気にかかることがあったようだが、しかしあつさり部屋を出る。」

僕自身、このペンダントが何なのかよく分かっていないが、少なくとも害はない。・・・だろう。うん、多分。

そうであってほしい。

疲れていたせいか、普段よりも温水が心地よく感じられた。ほんのりと温まった体と共に、気分も上気を帯びる。

鼻歌混じりで髪を乾かし、買ってきた寝間着に早速着替えてリビングへ戻る。

扉を開けて、まだ少し湿気を帯びている髪をタオルで拭きつつ、リビングで何かを操作するように手を動かしている草路さんに近寄る。何をやっているんだろうと覗き込むと、ビクッ！と大げさに驚いてから振り向く。

「あ、ああ・・木仙か」

「そんなに驚かなくても・・。にしても、それ、何ですか？」

「それ？」

僕は自分が自分の前に展開している、光の枠で構築された画面を指さす。

彼は「ああ」とまだ動揺を隠せない、多少揺れている声で答えてから、

「知らないのか。え〜と・・、V O A D<sup>ボード</sup>って言って、分かるか？」

全然分からないという顔をすると、彼は数度頷いてから咳払いをする。

一呼吸入れてから説明を始めた。

「ええとな、これは簡単に言えばパソコン・・は知ってるか？ああ、大丈夫だな。その機能と、携帯・・も知ってるか。うん。んで、これらの機能を集めて統合した、板状の情報伝達デバイス・・それがV O A D<sup>ボード</sup>だ。うん、よく分からないよな。ええとな、こんな感じで基本的には何も無い空間に投影して仮想画面を作り、それを操作することで使用するんだが、本体はこの仮想画面じゃない」

彼は、そこで一旦言葉を区切り、ポケットを探って一枚の小さな板を取り出す。

それは薄く、そしてガラスのように透明だった。上から覗けば、手のひらの肌の色まではっきり見えてしまいそう。

興味深そうに見つめる僕にそれを手渡してから再度口を開き、

「まあ、基本的にはメールとか電話とかをする便利ツールだと思っ  
てくれていい。その反応だと持ってないみたいだから、そのうち買  
いに行くのを勧める」

ふむふむ、と手のひらにすっぽり収まってしまっ、綺麗な板を弄び  
つつ、ふと、

「そういえば、正富さんも同じような画面を出してたんですが、あ  
れって・・・」

「ああ、俺のと同じものだな。他の皆も大体が持ってるよ。便利だ  
からな、何かと」

へええ、と感嘆に近いような興味の吐息をもらし、満足して草路さ  
んに返す。

なるほど。たまに師匠が手元でござござやってると思ったら、こん  
なのを使っていたのか。

僕が聞いてら、「お、お前にはまだ早いって!？」って泡食ってた  
けど一体何を見てたのやら。

長年に渡る疑問を解決し、すっきりとした気分になった。

そのまま、僕は遠慮がちにリビングで布団を引いて寝させてもらっ  
た。

就寝前に、

「そーいや布団・・・」

と草路さんが立ち上がり、襖を探って少し顔をしかめる。

どうしたのかと聞いてみると、言葉を濁して頭をかき、

「あ・・・布団、俺ので大丈夫か？布団だけは綺麗にしてるから衛  
生面は平気だと思うんだが・・・」

そう言われ、何を聞いているのかと少し疑問に思っ。

え〜と・・・

(衛生が大丈夫って言ってるんなら、ほかに何が・・・って、ああ!)  
「だ、大丈夫ですよ。においとか気にしませんし」

・せつかく草路さんが気を使って明言しなかったのに、しかも否定してしまうとは未熟。

思わず「しまった」という気持ちになるが、幸い、「そっか」の一言ですまされた。

しかしそれでも内心気にしているのか、彼はスプレーを出し、

「これ、『無臭式臭い撲殺』を使えば一瞬で何もかも消えるから、気になったら使ってくれよ?」

「ええと、それは安全なんですか・・・?」

「ははは」

・・・いや「ははは」って!? 大丈夫、大丈夫なのそれ!?

そう心の中で叫んでいる僕を無視し、せつせと草路さんは布団を敷く。

それが終わると、彼は自分の部屋（推定）に戻り、

「おやすみ」

と、それだけ告げた。

一人残された僕は、することもないのでとりあえず洗面所を借りて置いてあった未開封の歯磨きセットを使わせてもらった。

一応、さつき許可はとったので安心だ。

それでも少しは、他人の物を使うという罪悪感を得ているのは人に不慣れなせいなのか。

（師匠だったら何も気にしないんだけどなあ・・・）

思っても仕方のないことを思い、電気を消して布団に入る。

（早めに寝ないとな・・・。明日から慣れない生活が始まるわけだし）だからさっさと目を閉じ、来たる睡魔に身を任せようとしたのだが。

ふと、鼻をくすぐる不思議な香り。

花のまつたりとしたものでもないし、木々の爽やかなものでもない。では何か。

そう考えて、先ほどの会話を思い出す。

（臭い・・・消臭・・・消す・・・他人の布団・・・体臭！？）

連想し、たどりついてしまった。

そうか、これが、と鼻をひくつかせて枕に寄せる。

鼻孔に入る刺激は少なく、しかし不思議と脳に伝わるような。長時間嗅いでいると、頭がくらくらしてきそうな気さえする。

でも、決して不快ではない。

初めて経験する感覚に身を委ね、一種の堪能を味わっていると、ガタツ！！と扉の開く音がする。

眠気も今までの気分もすべて吹っ飛び、あわてて布団の中に潜り込む。

心臓が破裂するんじゃないかというほどのビートを刻み、僕もソウルミュージシャンの仲間入りふへへ。

「・・・？」

一瞬、僕の方に半目気味の視線が注がれた気がしたが気にしない。

しかし、不思議だ。僕を起こさなためだろうか、彼は忍者顔負けなほどの足運びで、足音は立たず、気配も極限まで消されている。

体術の一種なのだろうか、特に魔力は使われていない。

日常生活のどこにこんなスキルが必要なのかと純粹に問いつめたくなるが、先ほどの潜伏騒ぎを見ていると、力強く得心できてしまっそうだ。

それはさておき、彼はなにやら壁に向かって何かをした後、別の壁にも何かを施す。

しかし、この一日の疲労は相当なものだったらしい。

それに興味を向けるよりも早く、僕の意識は暗闇へと落ちていった。

さえずりが聞こえる。

風に乗り、空気の壁に阻まれてもなお、澄んだ音色を通す自然の声。それに促されるまま、僕は薄くまぶたを開いた。

「ん・・・」

目を開くと、見知らぬ天井と、住み慣れた小屋とは似ても似つかない空気を感じる。

（そっか、僕、学校に入ったんだ・・・）

今更ながらに再認識し、既に起きて朝ごはんを作っているらしい草路さんのところへ向かった。

僕は、見た。

モニターに映る人影が風を裂き、大気を破り、彼を滅ぼさんと慈悲なく襲いかかってくる光の束を難なくかわし、追撃も野道を行くように平然と避け、地面からの間欠泉も加速で振り切り、拳げ句の果てには宙を飛んで空間を“蹴った”のを。

彼はその勢いのままゴールへと突っ込み、荒い息を整えながら立ち上がる。

周りではギャラリィ達が歓声を上げたり、嘆息をもらしたり、各々の感想を行動として閉めてしているが、そんなことは僕の知覚は捉えなかった。

ただただ、圧倒された。

あんな速度で走り、それを制御してなお複雑な回避までをもちなす。間違いなく僕が見てきた中で、最強の“足”。

彼に石をかすらせただけで、あんな大金がもらえるというのも今なら納得できる。

彼は一体、何者なんだろうか。彼が住むこの学校は、まさか彼のよ  
うな強者つわものばかりが巢食う場所なのか。

分からない。分からない、が

先程から止まない僕の鼓動が、告げている。

これは、面白そうだと。

「やーやーやーやー皆今日も元気にギャンブルってるかなあ！  
？さあさあ、授業前の早朝合同訓練改め集団リンチ。なかなか見所  
あるね！？じゃー早速だけど金の回収 おおっと逃げるなよお？  
この“悪報鳩”こと神谷、逃げ惑う負け犬どもを捕まえるくらいは  
わけないぞお？ほらそこ、泣かなくい。代わりに僕が一杯笑ってあ  
げるからさ！？効果音で表せばドヤア・・・」

巨大なモニターが柱に取り付けられた、ロビー的な部屋の一部で金  
が舞っているのを横目に見つつ、僕は汗だくで戻ってきた草路さん  
に手を振ってから、タオルを投げる。

彼は礼を言ってからそれで頭をガシガシと拭く。

「あー・・・疲れた。つたく、新学期早々にやる気満々だよなあい  
つら・・・」

「はは・・・でもクサボ・・・草路さん、なんですあのめっちゃめちな  
回避力」

あー、と唸るように息を吐いて、頭を直接にかきながら、

「ま、俺の唯一の能力だからな。あれくらいできなきゃ泣ける」

「・・・にしても、攻撃側の人たちも相当でしたね。もしかして、こ

この生徒って皆あんな感じで？」

まさかまさか、と彼は疲労と共に呆れを混ぜ、

「あいつらは大体がランキングの上位者。詳しい説明は向こうで荒稼ぎしてる神谷にでも聞いてくれ」

僕はギャーギャー騒いで悲鳴が止みそうにない向こうを振り向いて、乾いた笑いをもらす。

「んじゃ、そろそろ授業だ。行こうぜ」

「あ、はい」

あー疲れたと、愚痴をこぼすようにぼやいて先を歩く草路を追いかけつつ、頭の中で聞き損ねた問いを流す。

（元々は戦闘用に生み出された僕達の中でも、上位の人たち・・・）それらから傷一つ受けることなく、逃げ切るこの人は、一体、何位なんだろうか？

教室に入ると、すでにそこにいたクラスメイトに軽い挨拶と、先程の模擬戦の冷やかしが浴びせられる。

後者の対応に圧される草路さんと離れ、うる覚えの自分の席に恐る恐る座る。

隣で教科書らしき本を読んでいた正富さんと軽い挨拶を交わすと、すぐに先生が入ってきた。

沙那雪先生、というらしい。

彼女は席を立って雑談をしている人たちを手を打ち鳴らすだけで座らせ、

「はいおはよう。皆元気？・・・元気そうだから面倒な健康観察は飛ばすわよ。大丈夫、答えは聞いてないから」

この大雑把もいつものことなのか、ツツコミを入れる人は誰もいない。

彼女は手元の出席簿を勢いよく閉じ、爽やかさを感じさせる笑みを

浮かべて、

「さあ今日の限はいつも通り先生の総合で、後は体育よー。はい  
終わり！」

「起立！礼！」

「「「ありがとうございます」」」

こうしてものの三分で朝のHRが終わり、休み時間に入る。

皆がわいわいと談笑する中、僕は相変わらず読書を続ける正富さんに声をかける。

「すみません、正富さん」「だからさんはつけなくてもいいよ？なんだい？」

「さっき先生が言ってた総合って、ええと、どんな教科なんでしょうっ？」

僕が知っている総合という教科は、国語や数学といった勉強とは少し離れ、社会問題などを学び、あるいは自分たちで調べたりして、自分たちなりの考察を出して見聞を深めるものなのだが。

先程の先生が言っていたものとは何となく違う気がしたのだ。そんな僕の思考を読み取ったのか、彼は「ええとね」という前置きをしてから、「世間一般でいうところの総合とは違って、これは単純に、国数理英社とかの科目をいっぺんにやるんだ」「は？え？・・・どうやって、ですか？」

そう聞くと、彼は困ったように苦笑して、

「それは多分・・・やってみれば分かるよ」

と、若干投げやりに答えた。

はあ、と納得を得られないまま相づちを打ち、そのまましばらく待機して、

「はいじゃ、授業始めるわよー」

「じゃあ皆、教科書を適当に開いてー。んで読んでね？分かんない

ところあつたら挙手すること。あ、木仙のはこれね？じゃ、開始」  
渡された数冊の教科書を困り顔で見、困惑の視線を隣の正富さんに  
向ける。

周りを少し見れば、皆は黙々と教科書を読み、軽く頷いていたりし  
て、共通してページをめくるのが早かった。

視線に気付いた彼は教科書に顔を向けたまま、目だけを動かし、苦  
笑。

「そのまま読み進めて」という旨の視線を返され、頷きつつ、ぺら  
ぺらと流し読みをする。

数学の教科書のようにだが、僕は算数程度の知識しか持ってないし、  
このような教材を使ったこともない。

どうすればいいんだろうと、そう思いつつ読み進める。

目次から本文へと行き、初歩らしい計算式へと至る。もちろん、見  
たことなどない。

理解できない数字の羅列にしか見えない。見えなかった、が。  
急に僕の頭の中に、閃きの光のような鋭い既視感が走った。

「・・・!？」

目の前の羅列が、“意味の分からないもの”ではなく、“どういつ  
た場合に使え”、“どうやって組み立て”、“どのようなものを導  
き出す”のかがはつきりと分かる。

まるで何回も繰り返し練習し、会得した技術のように。

試しに、隣に書いてある練習問題を解いてみる。

何かに計算しようとしたが、それすらも必要ない。

問題を見た瞬間、半ば無意識で計算始まり、数秒も経たぬうちに答  
えが出る。

何回やっても、応用をやるうとも、瞬時に片付く。

貪るように次のページ、次のページへと進み、変わらない不理解の  
納得を繰り返す。

国語や理科などに変わっても、その感覚は続いた。

気がつけば渡された教科書の半分ほどを読み終わり、その内容の全

てを理解していた。

呆然としてみると、教卓の沙那雪先生がにこにこしているのに気がつき、ハツと正気に戻る。

それを見た先生が軽く頷き、

「はいじゃあ皆、新学期だし転入生もいるわけだからざつと復習するわね」

「通称“第二児”と呼ばれる私たちはね、まあ生み出される過程で色々と言伝子とかをぶちこまれるの。“第二児”開発のために急発展した言伝子技術によって、細胞に注ぎこめる情報が増えて、個人差はあるけど産まれた段階で大学生から教授レベルまでの学力的知識と技能を持ってたりするのよ。んで、そこにオカルト的な要素が入ることで能力の発現が起こったわけなんだけど、今は飛ばすわね」先生は友人と話すような気さくな口調と声で話し、そのおかげですらすらと頭の中に内容が入ってくる。

何度もやったことなのだろうが、大概の人達は教科書を読んだままだが、先生は気にせずに続け、

「それで、わたしたちは本来なら長い時間をかけて覚える勉強の知識を最初から持つてるわけだけど、最初の段階ではまだ何も知らないままで、普通の人と変わらないの。だけど、こんな感じに教科書とか見たり、説明を受ければ、大概のことは把握できるのよ。感覚的には運動と同じ感じ。才能ある人は教えられたことをすぐに実行できるでしょ？ああでも、個人個人で持っている知識に偏りがあるから、分からないことは当然あるのよ。ただまあ、勉強に限ればそれは既にマスターしてることの延長線上のものが多いから、比較的早く体得できるんだけどね」

ほお、と僕が先程からの不可解に納得をしていると、チャイムが

鳴る。

「ちょうどいい感じね。じゃ、予告どおり後は体育。自由にやっ  
ていいけど、誰か木仙に基本的なこと教えてあげなさい。クサミチと  
か」

「おいおい先生、俺に教えられることなんてありませんが」

「移動法とか専門じゃない。攻撃関係は他がお願いね。じゃ終わ  
り！」

「起立！礼！」

「「「ありがとうございます」」」

はじめてのたいいく

「はいじゃあ、好きな人とペア組んでー」

・それは、教師という憎たらしい化け物から放たれる、恐るべき呪文。

その言葉、発音、意味を知覚し、把握した時点で数多くの人間が絶望と失意の底の底まで落ち、涙を流す暇もなく途方に暮れることとなる。

何故ならば、どれほど個人が、集団が、世界が嘆き、己の運命を呪おうと、非情な時間はその歩みを止めない。

むしろ、うつむいて現実から眼を背ければ背けるほど、現状は悪化へと加速する。

爆発しそうな心臓を抑えつつ、勇気を出すことができるのか。

それができなかったから今まで孤独だったのではないか。だがこのままでいいのか。いつまでも変わらないのか。

いや・・・やるんだ。やるしかない・・・！

そうやって一步を踏み出した少年は、内気な孤独者から、誰からも頼られるようになるリーダーとなったという・・・

「・・・という話を師匠から聞いたんですが、そうなんですか？」

「いや、俺に聞かれても・・・おい何だそこで膝ついてるやつら」

ここはグラウンド。

教室から離れ、運動靴に履き替えてきた。

なんでも、グラウンドは全部で二桁を超えるほどの数があり、気がついたら増えていることがざらなそうなので、詳しい数は把握しき

れていないらしい。でもその度に破壊されるので一定数に保たれるとか何とか。

「さて、周りは好き勝手にドンパチやってるが・・・どうしようかな。まずは基礎か」

いつの間に着替えたのか、学校から支給される簡素なデザインのジヤージをまとっている草路さん。

ちなみに僕は制服のままだ。まあ、動きやすい作りをしているので大丈夫だろう。

彼はどこからか教科書を取り出すと、適当な調子で開き、

「基本のその1」。魔力生成。・・・これはできるよな？」

「あ、はい」

僕は軽くうなずき、ついでという軽い気持ちで精神・・・正確には“意思”を集中する。

体を駆け巡る血液、そこから感じ取れる全身の感触。それらすべてを意識し、鼓動させるかのように高揚を重ねていく。

それを数刻の間にひたすら繰り返し、うっすらと“膜”のような、

“湯気”のような形の不過視のオーラをまとったのを感じる。

これが、俗にいう“魔力”。

僕ら第二児がその全力を出す際に無くてはならないものだ。

念のために魔力をそこそこまで高めると、それに満足した草路さんが再度教科書を見やる。

「基本その2」。身体強化。魔力を全身に巡らせて躍動させるイメージ。手本とかいるか？」

「あ、大丈夫です。・・・早く動けばいいですか？」

了承を得たので、まとわせているオーラを体に“取り込む”。

外に出ている水蒸気を自分の体に吸収するイメージ。

するとどうだろう、腹の奥底から力が沸き上がってくるような錯覚をえる。

明確に筋肉に力が増したりするわけではないが、活力のような実体のないものが生じる。

それをまとったまま、動き回るイメージ。すると、通常の感覚と共に起こる疾走感。

普段の自分なら数十センチほど横に移動するだけのステップ。だが、魔力で体を強化した今の僕は、数メートルもの距離を飛んだ。

「大丈夫そうだな。じゃその3だ。移動に関してはこれで終わりだな。ハイジャンプ。足に魔力を溜めて飛び上がるイメージだ。・あー知らなそうな顔してるな。こう、足まげて」

そう言っつて、膝を折ってぐっと構え、若干中腰になる草路さん。

「膝とふとももを中心として魔力を溜めて、フォローのために足全体にも付与。そんで力をそのまま放ってジャンプだ」

見よう見まねで草路さんの体勢を真似、魔力を溜める。

なるほど、今まであまり意識したことはなかったが、これは飛びやすい。

純粹に飛ぶだけだが、これを応用して回避などにするのだろう。

そう頷いていると、草路さんが近づいてきて、

「大体大丈夫だが・この辺があれだな」

え?と思った瞬間に、僕の後ろに回った草路さんが膝カックン気味に僕の膝を裏から押した・っつて!

「わわわ!」

すでに飛ぶ寸前だったので、慌てて姿勢を制御して体勢を立て直すうとするが、不意の衝撃で魔力が暴発。

足がもつれて凄まじい勢いで転がってしまいかとも思ったが、草路さんの調整は正しかったらしい。

驚くほどスムーズに足に魔力が回り、足裏が地面を離れたと思ったら、

「・・・え?」

草路さんの姿が点に見えた。

「軽くつて言っつて・・はないか。にしても飛んだなあ」

そんなのんきな草路さんの声を聞きつつ、僕は尻餅をついて落下し

た。

「さて、俺からは大体こんなもんだな。他の本格的なものとなるとちよつと時間が足りないし」

僕はわずかに恨みをこめて草路さんに礼をいった。

制服についた土を落としてつ、グラウンドにいる周りの人たちを見てみると、

「喰らえ！ “スーパーヒイイム超光線” ！！！」

「ぐっはあああああああああああ！」

皆一様に手から眼から全身から光線やら炎やらわけのわからない物体なんかを飛ばしていた。

流れ弾の後を眼で追ってみると、それが着弾した瞬間、シャレにならない轟音が鳴り響き、グラウンドに大穴が開いた。

だというのに、先ほど太めの光線を喰らった生徒は少しだけ焦げながら、しかし不敵な笑みを浮かべて立ち上がり、

「はあ、はあ・・やるな！ だがお返しだ！ “スーパービンタアア超張り手” ！」

魔力の輝きに包まれた張り手が、今度は風を伴いながら炸裂し、衝撃で少し空気が揺れる。

喰らった人がギャグ漫画のように吹っ飛び、数メートル以上を転がる。

だがまたノリノリで立ち上がる。

「あの、草路さん、この学校って一体・・」

「言うな、あと大体がこんなだから慣れないとこの先辛いぞ？」

そんなことを言われても・・。

僕が先ほどのハイジャンプなるものの復習をしている間に、草路さんが誰かをつれてきた。

草路さんと同じか、それ以下くらいかの背丈。しかし隆々と盛り上がった筋肉と、いささか厳つい顔つきがそれを感じさせない。

草路さんは「じゃあ、頼むわ」とだけ言い残し、さっさと去ってしまふ。

(ちよっ・・・!!初対面の人と二人つきりにして残さないで!お願い!接し方が分からない!)

心の中で悲鳴を上げるが、非情かな、草路さんは心なしか苦笑しながら行ってしまった。

おろおろしている僕と、黙ったまま僕をじっ・・・と見る男の人。

どうすればいいかわからず、意味もなく屈伸や背伸び、登校中に見かけたダンス集団の真似などをしてしていると、

「・・・つぶ、ふつぶ」

野太い声で、目の前の男が堪えきれなかったという様子で笑い出す。

彼は忍び笑いのようにくっくっくと肩を揺らし、一通り済むと、

「いや、すまないな。あの野郎にただの石で一撃かました奴、っていうんだからどんな化物かと思ってたんだが、予想してたよりもずつと面白いな」

これ、素直に喜んで良いんだろうか。

判断しかねて僕が引きつった笑みを浮かべていると、彼は再度「すまん」と笑う。

見た目からもうちよつと怖い人なのかとも思ったが、案外気さくでいい人なのかもしれない。

「俺は慎太郎。よろしくな。・・・さて、では始めようか。頼まれたのは攻撃だったか」

「あ、よ、よろしくお願いします」

「まずはパンチ。根っこの部分は移動と同じだ。こう、腕に魔力と、必要な力を込める」

彼はぐつと軽く拳を握ると、僕から見てもわかりやすいように、魔力の出力を大きくして、魔力の輪郭を浮き上がらせてくれた。

補足しておく、魔力というものは誰にでも備わっているもので、肉眼視できるかはその発生源の量か質による。つまり、第二兎ではない一般人でも、精神的な修行をしたり、格闘技を極めたりすると稀に操ることのできようになる人もいるらしい。

・・これもちらつと草路さんから聞いた話だけだね！なぜかちよつと皮肉っぽく笑ってたから印象深かつたけど！

ちなみに、今のよう湯気・・というよりは湯気のような火、と表現すればいいのだろうか。形状としては、太陽の表面を覆っているコロナに近いと思う。さつき理科の教科書を見て今思いついた。

そのような形として、“見える”ようになるためには、そこその量の魔力が必要となる。例えば、昨日僕が追いかけて回された“穴掘り”とかいう集団が主に使用していた、“ファイアボール”という魔法。あれは比較的簡単に使えるものだが、あの形にするまで、実際はかなりの反復練習が必要となる。魔力を固める“形”を強固に意識することにより、無駄な精神力を省いて披露を削減することができるのだ。

そういう意味では、彼がスパアン！と打ち出した拳からなるパンチは、ひとつの格闘技の型のように鮮やかで、魔力的な効率を考えてもかなり軽いものであるはずだ。

僕が今さつき習得したハイジャンプをさして変わらないだろう。感心を込めた視線でその拳動を見ていたが、一瞬後に鉄板を勢いよく叩いたような鈍い音が炸裂したので、感心の表情のまま拳の先を

見ると、案の定、

「……へ、へへ……」

「お、おい！大丈夫か！？そんなに俺が昨日トイレで唸ってたときに思いついた必殺技が効いたのか！？」

「そ、それが原因だとは思いたくないが……どうやら俺はもう、だめらしい……へへ、会ったこともないお袋の姿が見えらあ……」

「くそ、ダメだ、目の焦点が合ってねえ……！！誰か、誰か保健室へ！」

僕がひくひくと痙攣する頬を抑えずに慎太郎さんを振り返ると、

「……」

彼は「やべえ」といった面持ちで汗を滝のように流しつつ、うつむいて顔に影を落とす。

「……」

「……」

「……さ、さあ！やってみようじゃねえか！」

僕は無言で空高く拳を打ち上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4048x/>

---

背を向けて！

2012年1月2日10時47分発行